

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：34503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370144

研究課題名(和文) 海外コレクションの近世京焼の基礎的研究 大英博物館・ボストン美術館を中心にー

研究課題名(英文) Basic Study of Early Modern Kyoto Ware in Collections Abroad with a Focus on the British Museum and Museum of Fine Arts, Boston

研究代表者

岡 佳子 (Yoshiko, Oka)

大手前大学・総合文化学部・教授

研究者番号：50278769

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、海外の近世京焼を調査し、日本の出土・伝世品との比較から新たな京焼史を構築し、明治期の京焼研究の進展を明らかにする目的をもつ。大英博物館ではフランクスの収集品250点、ボストン美術館ではモース収集の180点を調査した。両者は明治初期の収集で、共通して蜷川式胤の影響が強い。メイドストーン博物館が所蔵する、マーシャム卿が京都で集めた作品105点と箱書215点も調査したが、これらは明治後期の収集で、より洗練された作品が認められ、日本の美術史研究の展開も明確になった。未紹介の仁清や古清水の優品を発見し、所蔵館の在外研究者との間にはデータ採取や写真撮影を通じ真の交流が生まれた。

研究成果の概要(英文)：This research aims at offering new perspectives on the history of Early Modern Kyoto ware by examining collections abroad and comparing them with works found in Japan. The goal is to show the development of research in the Meiji period. This project involved examining 250 ceramics collected by Augustus Franks in the British Museum and 180 ceramic from the collection of M.F, assembled by Edward Morse. Both corrections were amassed in the Meiji period under the influence of Nonagawa Noritane. The research focused on 105 ceramics and 215 wooden boxes that Marsham collected in Kyoto and bequeathed to Maidstone Museum. The collection was formed in the latter half of the Meiji period, in which sophisticated works. The research outcome provides valuable information regarding the development of Japanese art history. The research found excellent works of Ninsei and Koshimizu ware. Strong relationships were forged between the Japanese researchers and the overseas researchers through the examinations.

研究分野：日本文化史・陶磁史

キーワード：在外京焼 近世京焼 野々村仁清 尾形乾山 大英博物館 ボストン美術館 メイドストーン博物館

## 1. 研究開始当初の背景

海外コレクションを対象とした陶磁史研究は、主に輸出陶磁を中心に進められ、西田宏子氏による近世の輸出肥前磁器の研究(註1)、近代の輸出陶磁研究(註2)等の業績がある。本研究で取り上げるモース・コレクションに関しても、名古屋ポストン博物館に於いて美濃・瀬戸陶の展覧会が開催され、科研費による学術調査も実施された(註3)。だが、近世京焼に関する研究はほとんど認められない。それは、膨大な量の在外京焼が、国内の伝世品に比べ、質的に劣る海外向けの土産物と捉えられ、これら进行分析する視点と研究成果の予測が曖昧であったためと考えられる。

美術史の分野で、本格的な京焼研究が開始されたのは明治末である。以後、名工の作品研究という視点から研究が続けられてきた。確かに、京都には野々村仁清、尾形乾山、青木木米、清水六兵衛、高橋道八等の名工が輩出し、彼らの印銘を持つ作品、伝記を記した文献が残る。だが、名工のみが京焼の製作者ではなく、周辺の無名の陶工たちが京焼窯業を支えた。河原正彦氏は、これら無名陶工の製作した京焼を「古清水」と総称して集成し(註4)、中ノ堂一信氏は、文献史料をもとに産業史的な視点から京焼史を纏めた(註5)。両先学の業績を踏まえ、申請者は考古学の成果を取り入れて著作『近世京焼の研究』(註6)を纏めた。本書では、消費地遺跡の年代の確実な遺構出土の陶片と、名工や古清水の伝世品を対照させる形で、美術史に産業史の視点を加える形で、近世京焼の歴史的な展開を追った。ところが、出土遺物は工房製作の日用の碗皿類の小陶片であり、一方、伝世品は完形の茶道具や懐石具・置物類等の逸品である。両者の対比は困難を極めた。この問題を解決できるのが、じつは海外の京焼コレクションである。

本研究に先立ち、2011年9月に米国東海岸、2012年3月に英国の美術館・博物館の予備調査を実施し、ポストン美術館では「清閑寺」「音羽」「清水」等の印銘を持つ17世紀の古清水10数点を発見した。それらは出土京焼と同タイプの完形の碗類で、小陶片では不明であった形状や文様意匠が明確となった。また、同館と大英博物館で、仁清窯跡からの出土陶片と同様の鉄釉・錆絵茶碗を発見したが、両館では、これら地味な作品が仁清の真作との認識は全くなかった。さらに、日本にはさほど残っていない近世後期の工達の多量の作品が存在することも判明した。京焼研究が始まった明治末以後、研究対象は名工の作に相応しい逸品に限られ、それ以外の工房製作の量産品は日用に常用され、そして破棄されていった。一方、京焼の海外への流出が開始されたのは幕末から明治初期、すなわち、本格的な美術史研究によって京焼の評価が定まる以前である。予備調査を通じ、海外コレクションを本格的に調査し、いわば、日本で失われてしまった京焼を研究資料に

加えることから、新たなる展開が生まれると確信した。

註1「バーリー・ハウスの日本陶磁」『東西交流の陶磁史』(中央公論美術出版2008年)所収

註2 井谷善恵『オールド・ノリタケの歴史と背景』(里文出版2009年)今井祐子「フランス・ジャポニスムと九谷焼」(東洋陶磁第37号2008年)等

註3 名古屋ポストン美術館主催「モース・コレクションの陶磁器-志野・織部」展(平成14年)「モースコレクションの陶磁器・尾張」(平成15~16年)、平成14~15年度特定領域研究「モース・コレクションの陶磁器に関する調査研究」研究代表者：浅野徹

註4『古清水』(京都書院1972年)

註5『京都窯芸史』(淡交社1984年)

註6 思文閣出版、2011年

## 2. 研究の目的

本研究は、明治初年からその収集が開始された英国の大英博物館と米国のポストン美術館が収集した近世の京焼を対象として、主に、17~18世紀の仁清・乾山および同時代の京焼(古清水)の作品および18世紀後半~19世紀中期迄の清水六兵衛家・高橋道八家歴代の作品、これらを詳細に調査する。その成果を国内の出土京焼・伝世品等との比較検討し、そこから京焼窯業の展開過程を明らかにする。

加えて、収集品全体を通覧することから明治初年の殖産興業時代の京焼研究の実態を作品から明確にする。さらに、海外の美術館・博物館の学芸員と協力して研究を進め、近世京焼をめぐる国際共同研究の実現を目指すことを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究の申請時には、研究代表者のみの研究組織で、わずか4年で大英博物館・ポストン美術館が収集した膨大な量の京焼の全てを調査することは不可能であると考えた。したがって、「2.本研究の目的」の項目に記載したように、申請時においては17~18世紀の仁清・乾山・古清水などと18世紀後半~19世紀中期迄の清水六兵衛家・高橋道八家歴代の作品を対象に詳細なデータを採取すること、および収集品全体を通覧することから明治初年の研究状況を目的とした。

しかし、実際に海外の博物館・美術館では、目的の作品群を抽出することは困難であった。多量の日本陶磁が梱包されたままに収蔵庫に保管されている状態で、コレクションの実態を明らかにするためには、対象館が提示した作品全てに対して、詳細な調書を作成することが大切だということが分かった。

また、平成25年度は欧米の京焼を所蔵している多くの関係機関に調査の輪を広げたが、そのような方法はとらず、対象を英国の

大英博物館オーガスタ・フランクス(1826-97)、メイドストーン博物館のヘンリー・マーシャム(1838~1925)、米国のボストン美術館のエドワード・モース(1845-1908)の各コレクションの京焼と畿内の陶器に調査の中心を絞った。

さらに、全ての作品に関して、登録番号・所在カート番号、作品名称、産地・作者・窯場、年代、個数、法量、印・銘文、箱書・張紙、所見・備考、評価、調査日、調査者のデータを採取した調査票を作成した。加えて、作品1件につき、正面・左右側面・背面・底・印などのデジタルカメラの写真を撮影した。これらにデータと写真資料は、すべて対象館に研究資料として寄贈した。

このような詳細な調査によって、次に記載するような、多くの成果を得ることができた。

#### 4. 研究成果

##### (1)各年度の調査成果

本研究の各年度の調査日および調査諸品、特質すべき点は下記の通りである。

**平成 25 年度** 本年度は米国と欧州へ渡航した。第1回目の渡航は11月10日~18日迄で、ロサンジェルス・カウンティ美術館(11月11日・12日)において、青木木米・古清水などの作品5点。サンフランシスコ・アジア美術館(11月13・14日)では、1960~70年代にアベリー・ブランデーが収集した日本陶磁のうち尾形乾山・奥田穎川など約20点の京焼を調査した。

第2回目は、平成26年2月16日~3月8日迄、英国・仏国・米国東海岸に渡航した。英国では大英博物館(2月17日~19日)、ケント州メイドストーン博物館(2月20・21日)所蔵の京焼を調査した。前者はオーガスタ・フランクスの収集品を中心に、以後の収集も含む作品で、一応目録はあったが、カートに入れて収蔵庫に保管されており、抽出は不可能であった。そのため、乾山・道八などの京焼を含め湊焼・三国焼・大樋焼・淡路焼など諸国の陶器80点を調査した。後者は1905年に日本に滞在したマーシャム卿の収集で、18~19世紀の粟田焼の岩倉山・帯山・錦光山窯の作品50点を調査したが現在日本にも認められない貴重な作品群であった。さらに、パリ：チュルヌスキ美術館(2月24日)では1871~73年の短期間に収集された20点の京焼を調査した。続いて東海岸に渡り、ブルックリン美術館(3月3日)京焼・信楽焼12点を調査した。ボストン美術館(2月4日)では、調査を実施することができなかったが、担当学芸員アン・ニシムラ・モースと次年度の調査について打ち合わせた。

本年度は調査のみならず、11月16日にはサンフランシスコ州立大学で国際シンポジウム、3月2日にはワシントンDC、フォーリア美術館で“Chigusa and the Art of Tea”の関連講演会“Chigusa: Transformations of a Tea Jar”など招待講演を行い、海外交流につ

とめた。

**平成 26 年度** 本年8月中旬健康上に障害があり手術を行ったため、療養と回復のために海外渡航は不可能で、11月に予定していた米国ボストン美術館、翌年3月の英国調査は取りやめとなった。しかし、大英博物館・メイドストーン博物館には8月迄に調査報告書を訂正して寄贈し、また11月にはプリンストン大学で開催された国際シンポジウムには代読者を立てて参加した。また翌年3月には立命館大学アトリサーチセンター主催の国際シンポジウムに参加するなど、国際交流には努めた。

**平成 27 年度** 昨年8月に生じた健康上の障害の回復が不十分であったため、本年度の夏にボストン美術館から調査許可が下りていたにも関わらず海外渡航はできなかった。しかし、平成28年2月20日~29日には英国に渡航し、陶磁器調査を実施することができた。英国では大英博物館(2月22日~24日)では、作品約50点を調査した。京焼では主に楽焼の茶碗・香合類を調査し仁阿弥道八・楽了入の茶碗を発見した。乾山写や古清水などが認められた。京都以外では美濃焼・備前焼・梅林焼(滋賀県)・瑞芝焼・偕楽園焼(和歌山県)などがあり、黄瀬戸香合などは17世紀の良品であった。メイドストーン博物館(2月25・26日)では、本博物館に箱書をもつ木箱が保管されていることが判明したため、箱書55点と作品15点を調査した。

**平成 28 年度** 本年度は研究の最終年度であったため、米国と英国に3回渡航し精力的に調査を続けた。第1回目は平成28年6月8日~18日まで英国に渡航し、メイドストーン博物館において、箱書110点、作品40点を調査した。箱をもつが博物館は欧米ではほとんどなく、これらは貴重な史料である。第2回目は8月21日~9月1日まで米国に渡航し、ボストン美術館で、17世紀~19世紀の粟田、清水・五条坂焼などの古清水が中心に180点の京焼を調査した(22日~26日)。さらに、ピーボディ美術館では三代清水六兵衛家の明治期の絵巻を調査した(27日)。第三回目は平成29年2月20日~3月2日迄、再度英国に渡航し、メイドストーン博物館(21日~23日)では箱書50点、作品50点を調査し、制作年が17世紀迄遡る、仁清褐釉茶入・難波焼猪口・高取焼茶入の優品を発見した。続いて大英博物館(24日、27日、28日)において120点を調査し、仁清の色絵香合を発見した。海外調査のみならず、本年度は“Chigusa and the Art of Tea”の日本語版である『千種』物語—二つの海を渡った唐物茶壺』の供編著、およびセインスペリー研究所での国際シンポジウムへの参加など、国際的な活動を行った。

##### (2)所蔵作品と欧米コレクションの収集過程について

平成25年から4年間の研究期間において、英国では大英博物館250点、メイドストーン

博物館では作品 105 点と箱書 215 点、ボストン美術館で 180 点を調査し、その他、平成 25 年度には、ロサンジェルス・カウンティ美術館、アジア美術館、ブルックリン美術館、チェルヌスキ美術館などを調査した。

平成 24 年度に提出した申請書には、在外京焼の多くが、考古学調査によって出土すると同様の工房製作の日用の常用品であろうと予想したが、欧米の美術館、博物館には未紹介の優れた京焼があることが明確となった。その点に関しては、すでに(1)でも述べたが、各コレクションが系統立って収集されたことも明確になった。

それが、もっとも分かるのがモースコレクションの京焼である。今回の調査では、180 点を調査したが、これらは粟田、清水・五条坂焼などの古清水と総称される作品である。古清水には無印のものが多数を占めているが、モースは在印の作品を収集していた。18～19 世紀の粟田焼では「岩倉山」「帯山」「洛東山」「錦光山」などの窯元印をもつ作品が多く、それらの窯の展開が明確になった。「粟田」印をもつ信楽写水指、「藤」印の色絵草花文香炉、「山池」印の色絵鳳凰文徳利は 17 世紀にまで遡る日本でも残ることが少ない伝世品の京焼であった。

印銘をもとに陶磁器の年代や産地を判定する方法はモースと深い交流をもった蜷川式胤が『観古図説』を纏めるに際して用いている。実際、蜷川が鑑定したシールをもつ京焼が多く収集されていた。

蜷川式胤の鑑定シールが張り込まれた陶磁器は大英博物館のフランスコレクションにも多く認められた。モースおよびフランスは明治初年から 20 年代に収集しており、その時期には蜷川式胤の強い影響があったことが明確になる。

仏国のチェルヌスキ美術館は、蜷川以前の収集と考えられているが、上記の 2 館と同様の作品が多く認められた。したがって蜷川の『観古図説』は独自の見解ではなく、江戸末から継続する陶磁器評価の集成ではないかとも考えられる。

一方、今回、新たに調査に加えたメイドストーン博物館のマーシャムコレクションは、上記 3 館よりも遅れた明治後半の収集であり、コレクションの質は高かった。ヘンリー・マーシャム卿は伯爵家の 3 男で遺産を相続した。実業家として資産を増やして潤沢な資金源をもち、1908 年の約 1 年京都に滞在して京焼を中心に収集を行ったが、日本で死没した。収集品は遺族によってメイドストーン博物館に寄贈された。ここは自然史博物館でもあったため、日本の木箱が植物・動物標本の保存箱として使われ、現在まで保管されており、本研究で調査を終了した。また、各品では光悦・仁清・乾山・木米・初代六兵衛・久太や、宝山修平などの京焼の代表的陶工、岩倉山・帯山・錦光山など粟田焼の窯元、これらの良質の作品が認められた。

このような日本に未紹介の優品が収集されたのは、マーシャム卿が豊富な資金をもち京都で有能な美術商を通じて集めたことがひとつの理由だが、ちょうど、この明治後期から大正期にかけて日本美術史の成立時期であったことが重要である。前近代の美的に優れた美術・工芸品を代表作として各時代の歴史を語るという方法論が浸透してきたのである。さらにこの頃から、旧大名家や寺社から優品が売り立てられるようになる。

その時期にマーシャム卿が京焼を中心にした日本陶器の収集を行ったのである。明治初年の収集、その後の発展の状況が明確になりとともに、背景をなす日本美術史の展開までも、在外コレクションから明らかになった。

### (3) 調査を通じた研究者の交流

「2. 研究の目的」で述べたように、海外の学芸員と協力して研究を進めるという目的は、今回、十分に果たせたと思う。

先に記載したように、主要な調査館である大英博物館・メイドストーン博物館・ボストン美術館において、各作品に関して詳細な調査を行うことを望まれた。データ採取や写真撮影は代表研究者のみで行えるものではなかった。その結果、海外の研究者の協力を仰ぐ必要があった。

ことに英国の場合、渡航が 4 回も及んだため調査の折には、セインズベリー日本芸術研究所所長、ニコル・ルマニユール、水鳥真実の尽力で、博物館のスタッフや大学院生による協力があつた。調査参加者の名前は、研究協力者の項目に上げた。

ボストン美術館は諸般の事情により調査は 1 回に留まったが、博物館のアン・ニシムラ・モース、およびフリーア美術館のルイズ・コートから協力をいただいた。また、日本から下村奈穂子・前崎信也が渡航して調査を実施した。

調査のデータや撮影写真は両館に寄贈したが、大英博物館ではデータを英文翻訳し、館の研究データベースに加え、WEB 上でのデータと画像の一般公開も提案されている。

現在、欧米の美術館では全ての収集品画像の公開が積極的に行われており、画像のみならず、正確な制作年や産地等のデータが必要となっている。研究代表者が提供したのは、じつは欧米の美術館にとって必須の資料であった。このことが、真の国際交流へと繋がると確信している。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- 1 岡住子、「関西の陶磁器の近代」、『関西窯業の近代』大手前大学史学研究所研究報告第 17 号、6～34 頁、大手前大学史学研究所、2017 年
- 2 岡住子、「茶の湯とやきもの」、平成 25 年度大手前大学公開講座講義録『集うー衣・食・

- 住・遊』、29～50頁、2016年
- 3 岡佳子「仁清と乾山の登場—その形と絵—」、『なごみ』六月号、20～21頁、淡交社、2016年5月
  - 4 岡佳子、「信楽の茶陶—茶人の眼差しから—」、『滋賀県立陶芸の森開設 25周年記念、特別展 信楽への眼差し』、滋賀県立陶芸の森、111～129頁、2015年
  - 5 岡佳子、「仁清と乾山—その形と文様—」、『美術フォーラム 21』第29号「特集：やまと絵と琳派の交流」、82～91頁、査読有、2014年

〔学会発表〕(計7件)

- 1 岡佳子「Changing Concepts of the Value of 'Things' in Japan: From Gusoku to Dōgu」,(招待講演)、SISJAC Workshop “The History of Art Collecting and Patronage in Chanoyu”, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, Norwich, United Kingdom 2016年6月9日
- 2 岡佳子、「琳派と乾山焼」,シンポジウム『美術フォーラム 21』:「生活美術としての琳派」,社団法人 美術フォーラム 21 主催、於京都府京都市、京都国立近代美術館、2015年7月15日
- 3 岡佳子、「近世京都の御用達と陶土」,国際シンポジウム『伝える力3—京都の土と石—伝統工芸を支える資源—』、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「京都における工芸文化の総合的研究」(立命館大学)、立命館大学アート・リサーチセンター主催、於京都府京都市、キャンパスプラザ京都、2015年3月8日
- 4 岡佳子「From Gusoku to Dōgu: The Changing Value of Things」(根津美術館学芸員下村奈穂子による代読)“Chigusa in Context: In and Around Chanoyu in Sixteenth-Century Japan” Symposium, P.Y. and Kinmay W. Tang Center for East Asian Art, San Department of Art and Archaeology Princeton University 主催、Princeton University, Princeton, New Jersey, U.S.A 2014年11月8日
- 5 岡佳子「Chigusa: Transformations of a Tea Jar」展覧会“Chigusa and the Art of Tea” 関連講座(招待講演),The Arthur M. Sackler and Freer Gallery of Art Washington, DC, U.S.A 2014年3月2日
- 6 岡佳子、「欧米の美術館・博物館が所蔵する京焼について—17世紀を中心に—」,国際シンポジウム『日仏文学・美術の交流「トロンコワ・コレクション」とその周辺』、大手前大学交流文化研究所主催、於兵庫県西宮市大手前大学夙川キャンパス、2013年11月23日
- 7 岡佳子「Kyoto-ware Potter Ninsei & Chanoyu」京焼陶工仁清と茶の湯」(招待講演)、2nd Ocha Zanmai: 2013 San

Francisco International Conference on Chanoyu and Tea Cultures, College of liberal & Creative Arts, San Francisco State University 主催、於 San Francisco State University, San Francisco, California, 2013年11月16日

〔図書〕(計4件)

- 1 竹内順一、岡佳子、ルイズ・コート、アンドリュー・M・ワツキー編『「千種」物語—二つの海を渡った唐物茶壺』全247頁 思文閣出版 2016年、岡佳子「千種」の伝来と唐物茶壺—江戸時代初期を中心に」247頁(158～178頁)、岡佳子「野々村仁清作「色絵叭々鳥図茶壺」をめぐって」247頁(179～184頁)岡佳子「皓々斎宗也筆「茶壺紐飾雛形書」について」247頁(206～211頁)
- 2 河野元昭編『光悦—琳派の創始者』宮帯出版社、全378頁、2015年、岡佳子「光悦と朱屋田中勝介と宗因」378頁(155～182頁)岡佳子「光悦の陶芸」378頁(269～308頁)
- 3 Louise Allison Cort, Andrew M. Watsky 編“Chigusa and the Art of Tea” The Arthur M. Sackler and Freer Gallery of Art: 全286頁、2014年、岡佳子“Chigusa in the Early 17<sup>th</sup> Century” 286p.(160-p.170)、岡佳子“The Jar with Design of Mynah Bird by Nonomura Ninsei” 286p.(p.171-p.173)、岡佳子“Handbook on Jar Deciration and Knot-tying by Hisada Kokosai” 286p.(p.193-p.195)
- 4 石毛弓・小林宣之・柏木隆雄編『日仏文学・美術の交流「トロンコワ・コレクション」とその周辺』、全284頁 2014年、岡佳子「欧米の美術館・博物館が所蔵する京焼について—17世紀を中心に—」284頁(3～10頁)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岡佳子 (Oka, Yoshiko)  
大手前大学・総合文化学部・教授  
研究者番号：50278769

### (4) 研究協力者

【大英博物館・メイドストーン博物館調査】  
ニコル・ルマニユエール (Nicole Rousmaniere) セインズベリー日本芸術研究所所長・大英博物館キュレーター、水鳥真実 (Mami Mizutori)、セインズベリー日本芸術研究所所長、メアリー・レッドフアーン (Mary Redfern) チェスターピーティ・ライブラリーキュレーター、福永愛 (Fukunaga, Ai) ロンドン大学大学院博士課程・元岡田美術館学芸員、岸田陽子 (Kishida, Yoko) 元サンリツ服部美術館学芸

員、矢野明子(Yano,Akiko)大英博物館 三菱商事プロジェクトキュレーター、アリアドネ・シュルツ、(Ariadne Schulz)大英博物館 J T I プロジェクトキュレーター、ステファニー・サンチ、(Stephanie Santschi)大英博物館プロジェクトリサーチャー、サマンサ・ハリス(Samantha Harris)メイドストーン博物館コレクションマネージャー、レベッカ・アーノット(Rebecca Arnott)メイドストーン博物館コレクションオフィサー、バネッサ・トッシル(Vanessa Tothill)立命館大学大学院博士課程

**【ボストン美術館調査】**

ルイズ・コート(Louis Cort)フリーア美術館、アーサー・サックラー美術館キュレーター、アン・ニシムラ・モース(Ann Nishimura Morse)ボストン美術館キュレーター、下村奈穂子(Shimomura,Nahoko)根津美術館学芸員、前崎信也(Maesaki,Shinya)京都女子大学准教授